學界展望

# 中國における李卓吾像の變遷

森　紀子

## はじめに

「李贄は壯歳官と爲り、晩年削髪す。近ごろ又藏書・焚書・卓吾大德等の書を刻し、海内に流行せしめ人心を惑亂す。呂不韋・李園を以て智謀と爲し、李斯を以て才力と爲し、馮道を以て吏隱と爲し、卓文君を以て善く佳耦を擇びたるものと爲し、…秦始皇を以て千古の一帝と爲し、孔子の是非を以て據るに足らずと爲し、狂誕悖戾、（その書は）燬かざるべからず。」[1] とこのように彈劾、逮捕せられた李卓吾が獄中に自殺したのは萬曆三十年（一六〇二年）である。以後、三七〇年あまりもへた今日、實にその故をもって批林批孔の鬪爭の中で大いにもてはやされていることは、けだし當然といえばあまりにも當然のことである。「小人の忌憚なくして敢て聖人に叛ける者」[2] として、その死後ほとんど歷史上から抹殺されていた李卓吾の再發見再評價は民國になってから、とりわけ五四新文化運動を通じて行われたのであるが、それ以來今日に至るまで、一貫して肯定的評價をうけ續けてきた數少い思想家の一人としてあるといえる。しかしながらその評價の力點のおかれ方には明確な變遷がみられるのであり、それは中國における研究情況の變遷をそのまま反映しているとともに、研究對象としての李卓吾のもつ豐富な可能性をもあわせ示すものといえよう。私は今日の批林批孔鬪爭の中で推進せられている評價を含めて、李卓吾評價は大きく三變したと考える。本稿ではその評價の推移を簡單にたどることにより李卓吾の思想における問題點を整理するとともに、今日の李卓吾評價の有效性というものもあわせて考えていきたい。

## 一

李卓吾評價の第一段階ともいうべきものは、嵇文甫氏・容肇祖氏そして吳澤氏らに代表されるものである。嵇文甫氏は、文學史のジャンルにおける兪平伯氏らの晩明文學に對する評價に研究の新方向をみいだし、[3] それを思想史の領域に發展させる形で、「左派王學」（一九三四年）を著わした。すなわち王陽明以後、いくつにも分派した王學の中で、從來正宗とされてきた羅念菴らの一派を右派とし、つねに「狂禪」の二字で抹殺されてきた王龍谿及び王心齋指導下の泰州一派を王學左派と規定し、この一派こそが王學の眞骨髓であるとして、特別に顯賞しようとしたのである。そしてこれ以後、王學左派ということばは我國においても定着した。彼によれば、商業資本の擴大による表面的な南方都市の繁榮と、そのうらでの農村收奪の激化、それに由來する不斷の「農民變亂」を現象させた明中葉とは、一方で思想解放の時代、道學革新の時代であった。舊地主階級思想を代表する正統派道學は、一部士大夫の不滿とするところとなり、ここに陳白沙・王陽明がでるに及んで正統道學に對する叛旗がひるがえされたのである。王學左派は王陽明の眞の繼承者としてこの道學革新運動を陽明の範圍を越えて展開させたのである。そして

李卓吾は、「正式に王學左派に列入することはできないが、王學左派との關係はきわめて密接で、その思想行動は最もよく左派王學の精神を充分に表現している」④人物であった。こうして道學革新の左派的展開の極みに位置づけられた李卓吾の思想とは、「繩墨を守らず、儒佛の間に出入し、大旨は姚江（王陽明）に淵源す」⑤と大略されるものであり、その思想の多様性から「尋常の尺度でしばることができない」⑥この李卓吾を含めた左派王學の歴史地位はヨーロッパ宗教改革時代の多くの異端に比定されるのである。⑦

ついで容肇祖氏が「明代思想史」⑧（一九四一年）の中で李卓吾をとりあげている。すなわち王陽明の「良知」は王龍谿に「現成良知」としてうけつがれ、さらにそれは李卓吾の「童心說」「天下無一人不生知」となった。この良知——→現成良知——→童心の展開は、結局王學の左派的展開をその内面から表現したものであり、嵇文甫氏の位置づけと軌を一にするものである。そしてこの二人の觀點をふまえまとめあげたものとして、吳澤氏の「儒教叛李卓吾」⑨（一九四九年）がある。後の李卓吾評價の變轉との關係からこの論文で印象的なのは、良知・童心の系譜を浪漫主義主觀觀念論としてそれが徹頭徹尾の唯心論であることと、儒教批判をしていても李卓吾はやはり儒者であるということをとりわけて強調していることである。

要するに彼らによって確立された李卓吾像は王陽明の思想的發展の結果としてのそれであり、道學の異端者である。そしてここに畫かれた自由的、解放的、個性的思想家としての質は、以後の李卓吾評價の基調をなすものであった。更に李卓吾の思想の言及さるべき個々の問題——諸子の推奬と儒學の貶斥。林道乾、張居正、管仲等への稱賛。無私無欲の否定。功利主義の主張。大活動の禪である祖師禪。三教一致等々——も羅列的にではあるが、彼らによってほぼ提示されたといえるであろう。

## 二

一九五六年、朱謙之氏の「李贄——十六世紀中國反封建思想的先驅者」⑩が出版された。これはみづからいうよう歴史唯物主義の觀點をもって李卓吾の思想をその社會的基盤から分析、全體把握を試みたもので、その意味で意欲的であると同時に問題點をも多く含んだ論文といえよう。

彼は李卓吾が生きた嘉靖・萬曆年間の社會經濟の主要矛盾を以下のように分析する。すなわち對外貿易問題では、中國商業資本と外國商業資本（倭寇・ポルトガル人）間の矛盾。國内問題では中國商業資本と豪強地主間の矛盾。農民と地主間の矛盾。小地主と大地主間の矛盾。そして沿海貿易の根據地である福建泉州を出身地とする李卓吾の思想に最も深く影響をあたえたのは、倭寇によってもたらされた社會騷擾であった。その出身を沒落小地主階層と規定される李卓吾が、當時海上を横行していた林道乾（新興沿海商業資本）をたたえるのも、武學を重視するのもこのような點から說明されるのである。そして沒落小地主階層として現實政治に強い不滿をもつ彼はおのずから封建統治階級の叛徒となるのであり、商人に對する同情や、自由私產觀念の崩芽など總じて彼の思想は市民性を有するものとされる。

また、社會經濟上の小地主と大地主間の矛盾は、文化の側面に陽明學派對程朱學派の鬪爭として反映されるが、當然李卓吾は陽明學左派と位置づけられる。ただここで我々が注目しなければならない

のは、朱謙之氏が李卓吾を陽明學左派と認めながら、極力陽明の思想的影響を彼の中にみいださないようにしていることである。すなわち陽明學の中に李卓吾が重視したものは、王陽明の武功の業績であって「傳習錄」ではないとする。このように陽明の影響を否定的にみる傾向は他にもみられ、李卓吾が孔子の是非を是非としないという點に對しては思想の獨立自由性を認めて肯定しながら、自己の是非を以て是非とする點は王陽明の主觀唯心論の影響をうけた誤謬とするという具合である。王陽明を道學革新運動の旗手として高く評價し、その良知說の中に平等主義を認めた嵇文甫氏たちとの王陽明評價においての決定的な差がここにあらわれ、それが李卓吾評價にまで影響しているわけである。

さらに朱謙之氏は李卓吾の哲學思想、世界觀の中に唯物主義的傾向をみいだそうとする。彼によれば、李卓吾の哲學思想は二元論で、基本的には唯心主義であるが唯物論の方向を具有するものとされる。その唯物主義的傾向は「穿衣吃飯」を人倫物理とする道德觀からもうかがうことができるが、さらにその世界觀の根底に想定された「眞空」「太虛空」というものを、その著書「疑耀」の中で張橫渠の學說を引いて「虛空卽氣。」と認識しているということ。要するに氣の哲學をのべたという點をもって一つの根據とするのである。しかしながらここに引用された「疑耀」という書物自體に疑いがもたれ、容肇祖氏は「李贄年譜」（一九五七年）に「附、疑耀考辨」という一章をもうけ、これが李卓吾の著書ではなく張萱という人物の手になる僞書であることを論證している。

その他朱謙之氏は卓吾の思想の中に、諸子百家の學なかんづく墨子を提唱したこと、マテオリッチの影響、佛老の影響等を指摘しているが、とりわけ注目すべき指摘は張居正の影響である。李卓吾が何心隱を賞贊すると同時に張居正を賞贊したことはこれまでにもすでに指摘されてきたが、彼はこの兩者の間に思想上の共通性をみいだしたのである。すなわち李卓吾の唯心論は張居正の禪學の影響をうけたものであり、さらに歷史を一治一亂・文質の循環とみる觀點は張居正の歷史觀と全く一致するというのである。確かに張居正の思想の中には李卓吾と相似たところがその他にもいくつかみうけられる。私の思いつくままにあげてみても、秦・元という時代への肯定的評價。兵食論。反尙古主義など。そしてこのことは實務的武斷政治家としての張居正を思想史の上に興味深い存在として位置づけうる可能性をあわせ指摘するものといえよう。

ともあれ我々は朱謙之氏の論文の中に、①李卓吾の思想背景としての海上貿易商業資本の指摘。②王陽明と李卓吾の思想連關に對する否定的評價。③唯物主義的側面の強調の三つを特長的にとらえることにより、李卓吾評價の第二段階の方向づけをすることができるのである。

一九五八年、葉國慶氏は「李贄先世考」[11]という一文で「林李宗譜」というものを紹介した。これによれば李卓吾の先祖は泉州の海上商人であり、その中には明廷の通事官をしたものや、さらには色目人を娶って回教を奉じるものもあり、以後その子孫は皆回教を奉じたというのである。そして葉國慶氏は、李卓吾自身は回教ではなかったが彼の妻は回教であったという指摘もしている。かかる李卓吾における商業資本の影響を強く裏うちするような新事實の提出と、おりからの資本主義萠芽問題の論爭をふまえて、侯外廬氏らのグループ執筆にかかる「中國思想通史四卷下」（一九六〇年）が出版され

た。その第二十四章が「李贄戰鬪的性格及其革命性的思想」である。この論文でまず我々の目をひく主張は、泰州派は王學左派ではないとする主張である。泰州派の祖王心齊は、陽明門下となる前にすでに自らの思想を形成しており、門下となったあとでも自己と陽明との學の違いを堅持し續けた「假的陽明學派」であり、のち「自立門戶」して泰州派を創立したのである。このことは黃宗羲もみとめるところで、「明儒學案」では陽明の分派には浙中王門とか江右王門とか、必ず王門を明記するのに泰州派はただ「泰州學案」とのみかかれ、王門と一定の關係をもちつつも別に宗旨をたてた獨立學派と處理されている。というのである。[14] そして李卓吾についても、彼の師は王心齊の子である王東崖であり、ここから彼は泰州學派の繼承者であって、眞の王陽明・王龍谿一派ではないとするのである。[15] このように學術系統の上から陽明と李卓吾を分斷したのちは、陽明學派の「人人皆具良知」の命題は社會矛盾を彌縫する神學。李卓吾の「天下無一人不生知」は平等觀。陽明は道學家。李卓吾は反道學。とされるのである。

次に侯外廬氏は明中葉以後の中國封建社會の、特に長江と東南沿海區域にはすでに資本主義の新芽が萠生していたという前提のもとに、李卓吾の商人への同情、さらには勢利追求の肯定。平等觀、個性觀、私有觀念等はまさにこの初期萠芽資本主義關係に適應するものであるとする。これはほぼ前述の朱謙之氏にみられる主張を踏襲したものといえよう。そして彼はさらに一歩進めて、平等・個性の尊重を自然發展させた結果としての新たな不平等の發生に際し、李卓吾ははっきりとその自由競爭の強者にシンパシーを示していることを指摘し、ここには社會ダーウィニズムの氣味があるとまでいうのである。[16]

さて第三には李卓吾の思想における唯物主義的傾向についてであるが、この點に關してはなかなか論議があったようである。というのはこの「思想通史」の文章の母體となった論文が、先に邱漢生氏との共著で「李贄的進步思想」として「歷史研究」（一九五九年九期）に發表されているのであるが、その內容は必ずしも同じでない。一部に修正が加えられているのであるが、その部分というのがこの唯物主義に關する部分なのである。まず各節の題からして「歷史研究」では「李贄的與人道主義的平等觀和個性說相聯結的唯物主義思想」「李贄的二元論傾向及其唯心主義的彼岸」とあるものが「思想通史」ではそれぞれ「李贄的人道主義的平等觀和個性說」「李贄思想中的唯心主義的彼岸」とかえられていることからも推測できるように、「歷史研究」の本文で主張されている李卓吾の人道主義と相關連した唯物主義とか、自然主義と相關連した唯物主義といった類いの表現が「思想通史」ではすべて削除されており、その補足說明といった形で、李卓吾のように道德觀、社會觀の上で唯物主義の理解をしていても自然觀の上に唯物主義の原則が堅持されていないのでは、つまるところ唯物主義の高さに到達することは不可能であるとコメントがつけられている。[17] そして結局、封建社會の一切のきづなをのがれようとして禪の中にのがれてしまった時代矛盾の悲劇を李卓吾の上にみいだすのである。

かくして前期的商業資本のイデオローグたる李卓吾像がここに提出されたわけであるが、一九六五年以來、文化大革命が急激に進展させられていく中で侯外廬氏は周揚一派の實權派として批判をあび、[18] それとともに李卓吾がとりあげられることもなくなってしまった。

それは決して李卓吾評價が否定されたことを意味するものではなかったのだが、そんな錯覺におちいらざるをえないような沈默の期間であった。

## 三

李卓吾が再び活發に論じられるようになったのは文化大革命をへた今日の批林批孔闘爭の中においてである。そして李卓吾評價もあらたな一面をここに展開するのである。まづ「光明日報」（一九七三年十一月十三日）に北京師範大學、慶思の署名で「李贄反理學、叛聖道的闘爭」という一文が掲載された。宋明時期の二程・朱子・王陽明などの反動哲學家が後期封建社會統治秩序を守る新儒學―理學を創造したが、李卓吾はそれにあえて反對した反理學の進歩思想家と規定される。當時の社會背景として資本主義萠芽を認め、李卓吾を畢竟、地主階級内部の革新思想家とみとめ、そして最後に五・四運動の打倒孔家店の闘爭の中で李贄の思想のあたえた積極的影響を指摘して、その批孔闘爭への有效性を主張しているが、内容的には從來の研究成果をそのままうけついでいるにすぎない。

それから丁度七ヵ月をへた「人民日報」（一九七四年六月十三日）にやはり同じ署名で「尊法反儒的進歩思想家李贄」という論文がかかれている。この半年あまりの間におきた變化をその題目の上からも伺うことができよう。すなわち批孔運動の深まりが單なる反孔反儒の指摘だけではなく、中國思想史を儒法闘爭史ととらえていく觀點を確立したことを端的に反映しているわけである。當然この論文においても李卓吾の尊法の側面を示す一章がさかれるわけで、秦始皇帝や柳宗元の「封建論」に對する評價、李悝・吳起・賈誼・桑弘羊など法家の學者に對する評價がとりあげられている。これらはみな、從來孔子の是非にとらわれない李卓吾の個性的な人物評價の例として馮道や卓文君に對する評價とともに付隨的に紹介されてきたものであるが、それを彼の尊法觀を示すものとして眞正面におしだしたのである。このような李卓吾の尊法性の強調はやがて、李卓吾その人をも法家の思想家として規定するようになるのである。

「明代著名的法家代表李贄――讀《藏書》筆記[17]」という論文が包遵信氏によって同じ六月に發表された。彼は李卓吾を法家とみとめる根據の第一をその人性論にもとめている。すなわち、宋・明の道學では「人性皆善」という認識のもとに「滅人欲、存天理」をそのスローガンにするが、それに對して李卓吾は人心はすなわち「私心」であるとし、道學家が功利をいうことをいみきらうのを「畫餅の談」とそしる。そもそも中國歷史上の搾取階級の人性論には、その基本的なものとして儒家の性善說と法家の性惡說の二派があるが、李卓吾のこのような「人皆有私」說は理論上法家の性惡論と一致するというのである。もちろんこの「私心」は從來、商業資本イデオローグとしてうけとられてきたものである。次に彼の尊法反孔思想を顯著に示すものは、歷史上の法家と法家思想を具有する進歩人物に對する評價である。これはすでに慶思氏があげた通りであるが、その際卓吾の「藏書」では法家と儒家を對比しながら、比較分析を試みていることも、その尊法反孔の一つの特長として指摘されている。たとえば「彊主名臣」「富國名臣」「才力名臣」等の傳の中に法家の人物は入れられているが、彼らに對しては「未必知學而實有學」といい、いわゆる儒臣には「雖名爲學而實不知學」と酷評するとか、荀子と孟子を比較すれば、荀子は孟子よりも「其文更雄傑、其用之

更通達而不迂」というといったたぐいである。包遵信氏は李卓吾の歴史認識における一治一亂という循環論や、「是非無定質」という相對主義の中にその思想的限界をもあわせ示すが、そうであっても、李卓吾が尊法反孔の進歩的思想家とされることにゆるぎはないのである。かくして法家の李卓吾というよび名は定着しつつあるようである。他に例をあげれば、「人民群衆是創造歴史的動力」[18]という論文の本文の中で「歴史上的法家如商鞅・韓非・王充・王安石・李贄等人」といった表現がされている外、「法家著作選讀」[19]という本の中にも李卓吾の「贊劉諧」「題孔子像于芝佛院」という文が收錄されているのである。

以上簡單ではあるが、三變した李卓吾像の概略をのべた。一言にしていえば、道學改革の異端者→反封建的商業資本イデオローグの代辯者→法家思想家という變轉である。このような評價に對する反論はむしろ容易といえよう。第一にこのような評價を生んだその背後にあるところの、中國思想史を唯物主義と唯心主義の鬪爭史とみる觀點、あるいは儒法鬪爭史とみる觀點のいづれにも、あまりに政治的にすぎるという一般的警戒心がまず働かされることであろうし、何といっても、李卓吾の「學問の系統が何よりもまず陽明學であり、特に陽明學左派であったことは彼じしんの再三いうところに徴して動かしがたく、研究者の間でも異論はない[20]」日本の學界からみれば、王陽明と李卓吾の分斷は暴力的とすら思えるもので、道學の異端者としての彼が、道學からねじきられてしまったところに、そもそも、今日の法家李卓吾の誕生を許す遠因があったといえないこともない。しかしながらそのような武斷ぶりにもかかわらず、唯物論者李卓吾の確立はほとんど成功しなかったといえる。あるいは又、思想を價値づける絶對基準が外在化しているため、李卓吾における禪の要素には、容肇祖氏が「大活動の祖師禪」としてある種の力を豫想させた以外は、一貫してその唯心論であるが故の落後性を指摘するに止まり、その歴史認識では、循環論であるところに彼の限界を示す。という具合に常に時代的限定ということばでしめくくられる形式には、思想の效用性というものがそんなに單一的なものかどうか、問いただしたくなる。だがこのような反論のみを綿々とかきつらねていってもあまり生産的でないだろう。まさに短所は卽長所なりで、このような鮮明な論斷ぶりは、むしろ一方で我々に問題點をはっきり把握させてくれる。すなわち私にいわせれば、李卓吾に唯物主義をみいだそうとするような努力にくらべれば、現今の法家として李卓吾を設定しようとする方向は、よほど現實的かつ有效性をもったものといえる。一つには從來、諸子學というものが黄金時代であった春秋戰國の時代でのみ考察されることが一般的であり、以後は壓倒的に儒學史であったことへのいま一つの視野の提供としての有效性であり、その際、李卓吾自身が、儒佛道三教合一の思想や、諸子を顯賞するような點にみられるよう必ずしも學のわくにとらわれない發想をもっていることから、同樣に學術史のわくにとらわれない思想史としての立場からアプローチする場合、その學術系統を陽明學とすえながら彼の法家的要素を重要視することにさしたる矛盾はないわけである。もっとも現在はただ法家であると指摘するに止まっているだけで、明代という歴史世界の現實の中にそのことがどのように有效性をもちうるのか必ずしも說得的でない。漠然と法家思想は革新であり、その社會經濟的背景に資本主義萠芽があるというだけではまるで說得力をもたないのであって、資本主

義萌芽と、海上商人の系譜を背景に李卓吾の思想の中に、欲望や自由競爭の肯定、商人擁護といった具體的な一連の商業資本イデオローグをみいだした分析が、彼の思想の様々な要素をかなり包攝しえたことによってそれなりの説得性をもちえていたこととくらべたらいまだしの觀がある。李卓吾のこの法家的な要素を明代という時代に生かすためには何を媒介としたらよいのか。私は張居正との思想的連關を考察することにその可能性をみいだす。反封建的思想の持主であるはずの李卓吾が、何故に國家權力の權化ともいえそうな獨裁政治家をあれ程に賞贊するのか。朱謙之氏は李卓吾に對する張居正の影響として禪をあげた。確かに禪は張居正の思想の重要なモチーフである。それが彼に非常な能動性をあたえていることは事實である。だがそれとともに彼は、何よりもまず、「申韓刑名の學」[21]としてそしられた法治主義の政治家としてあった。そして彼の法治主義の背景に、政治の客觀化という要請が、學術的立場を異にしながら、東林黨の人々、黄宗羲の張居正評價と、明末をつらぬいて脈々としてある。さらに具體的にいえば、政治を道德から切り離そうと試みる張居正の兵食論[22]、反尙古主議、秦、元という時代への評價[23]といったものが、いちいち李卓吾のそれと符合するものであることは既に指摘した通りである。そして卓吾自身、知縣として政務をとった時には、法家が依據した老子の愚昧政策を尊んだといわれる。卓吾は張居正のこのような思想面にのみ贊同を覺えているのか。あるいは沒落小地主としての彼には政策的にも張居正を支持しうる可能性があったのか。そして何よりもこの兩者の根底にある、禪にしろ、童心説にしろすぐれて唯心的な思想と、法家的思想との内的なつながりはどのような構造をもって發揮されているのであろうか。今の私には疑問ばかりが先走るのであるが、要するにここでいいたいことは、李卓吾の思想の法家的要素を追求するには必ず、張居正とのかかわりをおさえていかなければならないということにすぎない。

## 四

ところで全國的な儒法鬪爭のエネルギーはここに物的な成果をもあげることとなった。李卓吾の新たな著書の發見である。すなわち「從《史綱評要》看李贄的尊法反儒思想」[24]という論文が王榮剛・嚴同明・韓天宇という三名の連名で上海からだされた。彼らは文末にいうところによれば、それぞれ長江農場、東風農場、前哨農場の青年勞働者である。これによれば、「史綱評要」は明代原刻本で全部で三十六卷あり、その内容は三皇五帝から元代に至るまでの歷史事件と歷史人物に對して評論を加えたものである。體裁は編年體を採用し、まず歷史に關する材料を摘錄したあと、李卓吾が自分の論評を加えるというスタイルをとっているという。そして本論文の中では《史綱評要》摘編として評秦始皇置郡縣とか評李斯焚書之議とか尊法に關する記事を部分的に紹介している。またこれに呼應して福建泉州市文物管理委員會と厦門大學歷史系の名で、「介紹李贄的一部重要著作—明刻本《史綱評要》[25]」という論文がよせられている。これによると事情は一層くわしく、最近上海圖書館にも二部の「史綱評要」が藏せられていることが知られたが、福建泉州市では一九六〇年に蔡友敬という人から寄贈されて以來、大衆に公開されているというのである。卷首に「明溫陵卓吾李贄評纂、新都寧野吳從先參訂、武林仙郎何偉然校閱」とあり、その出版は序文のかかれた萬曆四十一年（一六一三年）と推定されている。その内容は「藏書」「焚

書」と比較してみると多くの觀點が基本的に一致し、秦始皇に對する評價などはむしろ一層深まっている。ただ朱子に對して大いに賛揚を加えているなど、いくつか「藏書」「焚書」と矛盾した點があることも指摘され、それは參訂者の吳從先が增補したことにより、彼の意が滲入しているのであろうとされている。

確かにこの「史綱評要」という書名は「福建通志」卷七十二にも李卓吾の著書として記錄されているものであり、容肇祖氏も未見の書目としてあげていたものであった。[27] これが眞實李卓吾の著書であるならば重要な發見といえよう。というのも、一つには「藏書」の姉妹編であるといわれても、すでに「藏書」という歷史評論がある上にこの本があるのもいささか屋上屋を重ねる感がないでもないことと、とにかく李卓吾の本には、その人氣の故にきわめて僞書が多いということは定說であり、すでに同時代の人の口からそれがいわれているのである。本論でも容肇祖氏が「疑耀」を僞書と考證したことを既にあげたが、最近では同じく「福建通志」卷七十二に李卓吾の著書とされている「李氏說書九卷」について岡田武彥氏が大いなる疑惑を提出している。この「李氏說書」九卷本は中國では未見の書とされているが、日本では九州大學に現存しているものである。岡田氏は「王陽明と明末の儒學」[28]で李卓吾をとりあげたその付錄として、「李氏說書」の一章をもうけられ、まずその序文が一言も李卓吾にふれていないこと。李贄編輯、林兆恩閱著という何とも奇妙な表記。そしてその內容が林兆恩の「林子全書」におさめられている「四書正義纂」の論と、林子曰の部分が李子曰、卓吾曰と變えられているだけで一字もちがわぬ章が相當數あるという重要な指摘をされている。更に島田虔次氏は、李卓吾に「自刻說書序」というものがあるからには「說書」とよばれた本があったことは疑いないが、この本來の「說書」は卓吾の著書で「道古錄」とよばれているものに相違ないと推論されている。この他私見でも、「思想通史」や最近の批孔文獻の中で卓吾の著書として盛んに引用されている「四書評」という本について、李卓吾と同時代の盛于斯の「休菴影語」という本に「又、四書眼・四書評・批點西遊、水滸等の書の若き、皆李卓吾を稱するも、其の實、皆葉文通が筆なり」[29]とある。もちろんこの一事だけでは何事も決定しないが、これに對しいささかの言及もないのは不思議である。[30]

いづれにしろこのようなものは實物に親しく接し比較しない限りいた仕方ないことであり、かような點からも中國との學術交流の更なる進展を願うのである。最後に昨年十一月に來日された、北京大學社會科學學術代表團の團員の方から、「史綱評要」が發見されたという話とともに、福建で「四書評註」という李卓吾の本が發見されたという話を伺ったが、どのようなものであろうか。

**註**

① 「神宗萬曆實錄」卷三百六十九　萬曆三十年閏二月乙卯　禮科都給事中張問達疏

② 顧炎武「日知錄」卷十八　李贄

③ 嵇文甫「左派王學」（開明書店印行）序

④ 同右　六四頁　李卓吾與左派王學

⑤ 同右　六八頁

⑥ 同右　七八頁

⑦ 同右　一〇一頁　左派王學的歷史評價

⑧ 容肇祖「明代思想史」（開明書店）

⑨ 吳澤「儒敎叛徒李卓吾」（華夏書店）

⑩ 朱謙之「李贄—十六世紀中國反封建思想的先驅者」（武漢　湖北人民出版社）

⑪ 「歷史研究」一九五八年二期

⑫ 侯外廬「中國思想通史」四下（人民出版社出版）第二十二章　泰州學的思想及其階級性與人民性　九七二頁

⑬ 同右　一〇五二頁

⑭ 同右　一〇七四—一〇七五頁

⑮ 同右　一〇七六頁

⑯ 高田淳「中國における思想鬪爭——マルクス主義哲學史家・侯外廬の場合——」『世界政經』一九七四年十月號にはこの間の事情が要領よくまとめられている。

⑰ 「文物」一九七四年六期

⑱ 薛慶松「學習與批判」一九七四年九期

⑲ 「法家著作選讀」（中華書局出版　一九七四年七月）一九一頁・一九七頁

⑳ 島田虔次「朱子學と陽明學」（岩波新書）一八三頁

㉑ 「張陽和集」卷二　復查毅齋

㉒ 「張大岳先生文集」卷二十五　答總憲吳大恆　卷三十一　答福建巡撫耿楚侗談王霜之辨

㉓ 同右　卷十八　雜著卷二十九　答楚學道金省吾論學政

㉔ 「學習與批判」一九七四年八期

㉕ 「文物」一九七四年九期

㉖ 容肇祖「明代思想史」二三四頁

㉗ 岡田武彥「王陽明と明末の儒學」（明德出版社）昭和四五年

㉘ 盛于斯「休菴影語」（民國二〇年開明書店）三六頁西遊記誤

㉙ 侯外廬氏は「中國思想通史」一〇五〇頁で周亮工の「因樹屋書影」の「當溫陵（李卓吾）焚書・藏書盛行時、坊間種種溫陵之名以行者、如四書第一評、第二評、……皆出文通手」という記事に言及しているが、「四書評」には第一評、第二評というよび方がないということからこれをしりぞけている。